HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	同一指示解釈の語用論的原理
Author(s)	時崎, 久夫
Citation	北海道大學文學部紀要, 39(3), 73-90
Issue Date	1991-03-29
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33570
Type	bulletin (article)
File Information	39(3)_PL73-90.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

同一指示解釈の語用論的原理

時　崎　久　夫

0. はじめに

英語における名詞句の同一指示については，これまでに多くの研究がなされてきたが，現在もなおいくつかの問題が残っている。小論は，Chomsky (1981) の Avoid Pronoun principle を一般化した語用論的原理によって，同一指示解釈の現象を統一的に説明しようとするものである。(1)

以下，まず第1節で Avoid Pronoun principle について概観し，さらにこれを一般化した Avoid 'New' NP という語用論的原理を提案する。次に第2節ではこの原理と統語構造の関係について論じ，名詞句位置の priority (優先性) という概念を用いてこの原理の働き方を示す。最後に第3節では英語以外の言語にも目を向け，この原理の普遍的な性質について考察する。

1. 原理の一般化

Chomsky (1981) は次の同一指示の事実を Avoid Pronoun principle (代名詞回避の原理) によって説明している。(2)

(1) a.??*John* would much prefer [*his* going to the movie]
　　b. John would much prefer [PRO going to the movie]

(1 a) の代名詞 *his* は，もし *John* との同一指示が意図されているならば (1 b) のように PRO に置きかえることが可能である。よって (1 a) は，pronoun を避けて PRO を用いることができるにもかかわらず pronoun を用いているため Avoid Pronoun principle に違反しており，同一指示解釈が困難になっていると説明される。

これを受けて安井・中村 (1984) は平行的な原理 Avoid Name の存在を示唆しているが，次の例などはこの原理によって説明されることと思われる。(3)

(2) a. **Johnson* thinks that *Johnson* is popular.
b. *Johnson* thinks that *he* is popular. (Lakoff 1976 : 301)

(2) においても，もし同一指示が意図されているならば，(2 b) のように代名詞を用いることができるのであるから，(2 a) のように name *Johnson* の繰り返しをする必要はない。よって (2 a) は Avoid Name principle の違反となり，同一指示解釈は排除されることになる。

Chomsky (1981) が指摘しているように，こういった原理が「必要以上のことを言うな」という会話の原則と関連しているとすれば，この他にも同一指示解釈の原理やそれによって説明される例があるはずである。そして実際，以下の例がこれにあたるものと思われる。(4)

(3) a.***John* said that *John Goldsmith* would win.
b.*?*John* said that *John* would win.
(4) a. **Johnson* thinks that *the bastard* is popular.
b. *Johnson* thinks that *he* is popular. (Lakoff 1967 : 301)
(5) a. *After I talked to *John*, *THE BASTARD* went and spilled the beans.
b. After I talked to *John*, *the bastard* went and spilled the beans. (Akmajian & Jackendoff 1970 : 124)
(6) a. *After *HE* woke up, *John* went to town.
b. After *he* woke up, *John* went to town. (Ibid.)

(3) の例では，Avoid Full Name という別な原理を仮定すれば，(3 a) の方が (3 b) よりも容認性が低いという事実を説明できるだろう。同様に (4) の例から Avoid Epithet という原理を考えることができよう。また (5) 及び (6) の例では，強勢の置かれた名詞・代名詞は同一指示と解釈されないので，Avoid Stressed Form という原理も働いていると言える。

さて，これらの Avoid α という形の諸原理は，すべて Grice (1975) の会話の公準の1つ，「必要以上のことを言うな」という公準に関連していると考えられる。よって上の諸原理を一つの形にまとめることが考えられるが，そのためにまず次のような名詞句型の情報の新旧に関する階層を仮定してみよう。(5)

(7) New/Old Information Hierarchies:

i. Full Name > Name > Epithet > Pronoun > PRO/pro (ϕ)

ii. Stressed Form > Unstressed Form

これは名詞句の型によって，それが表す情報の新しさが異なると考え，左から新しい順に並べたものである。(7 i) は形の点からの，(7 ii) は強勢の有無の点からの階層づけとしてある。例えば話し手が聞き手の知らないある人物のことを談話中に導入しようとする場合，あるいは小説の冒頭部を考えてみよう。話し手はまず 'out of blue' 全く新の情報として full name の形でその人物を導入するだろう。そしてその後に name あるいは pronoun を用いてその人物を示すことになる。(7 i) の階層はこの状況をふまえて，逆に名詞句の型の点から情報の新旧を予測することができるという考えに基いている。また (7 ii) の強勢の有無について言えば，いったん談話中に導入された名詞句は旧情報となるが，それをまた特に取り上げて新情報としてもう一度示したい場合にはその名詞句に強勢を置くことになる。このように (7) は名詞句型が選択されるときの語用論的状況を示しているものと言える。

さて，この階層 (7) を仮定すると，(1) から (6) の事実を説明する Avoid α の諸原理は，階層上でより右の，すなわちより旧の名詞句型を選択せよとしている点で共通である。そこでこれらの原理を Avoid α の形を使って次のように一般化して示すことにする。

(8) Avoid 'New' NP

(8) は「新」の名詞句を避けよ，というもので，ここでの 'New' はあくまでも相対的な概念である。ある名詞句が 'New' であるかどうかは，その名詞句型と，それと交替しうる他の名詞句型との階層 (7) における相対的な位置で決まるからである。例えば (7 i) において pronoun は PRO よりも 'New' であり，それゆえ (1 a) の *his* は，(1 b) の PRO との比較の上で 'New' となる。同様に (2 a) の name *Johnson*, (3 a) の full name, (4 a) の epithet, (5 a) 及び (6 a) の強勢形は，それぞれ対応する (b) 文の名詞句型との比較上 'New' であると言える。よってこれら (1-6) a 文の 'New' NP は，同一指示解釈が意

図される場合には (8) の原理に従って回避されねばならず，(1–6) b 文のように，より 'Old' の名詞句型に置きかえられる必要がある。すなわち (1–6) a を同一指示とする解釈は原理 (8) の違反となり，この解釈が実際に不可能だという事実が正しく説明されることになる。またこのことを聞き手の解釈という点から見れば，より 'Old' の名詞句型が使えるのに，わざわざ大きな 'New' の名詞句が用いられているのは，話し手が同一指示を意図していないからだ，と聞き手が判断しているということになる。[6] 同一指示ならば言語の経済性に従ってできるだけ省略するということが話し手と聞き手両方の頭の中にあるのだと考えられる。

以上この節では Chomsky の Avoid Pronoun をもとにして Avoid 'New' NP (8) という一般化した語用論的原理を提示した。

2. 名詞句位置の優先性

この節では上に述べた原理が同一指示の問題例をどう説明するのかを考えていくことにする。次の (9) から (11) はよく知られた例である。

(9) a. *John* ate supper before *he* left town.
b. **He* ate supper before *John* left town. (Lakoff 1976 : 277)

(10) a. I spoke to *Ben* in *his* office.
b. *I spoke to *him* in *Ben*'s office. (Reinhart 1983 : 53)

(11) a. *Rosa* entered the room and *she* collapsed.
b. **she* entered the room and *Rosa* collapsed. (Ibid : 54)

ここではまず Avoid 'New' NP が文中で線的順序に従って左の NP から右の NP へと適用していくと仮定してみよう。すると (9–11) a では右の NP として *he, his, she* があり，これらは階層 (7) において Name よりも 'Old' な pronoun であるため Avoid 'New' NP の原理に合っていると言える。これに対して (9–11) b では逆に name が pronoun の右にきており，Avoid 'New' NP は pronoun, name の順に適用されるため，name がこの原理の違反となる。このようにして (9–11) の例は語用論的原理が線的順序で名詞句に適用していくと仮定すれば正しく説明することができる。

しかしながらこの仮定では次のデータを説明することができない。

(12) a. Before *John* left town, *he* ate supper.
b. Before *he* left town, *John* ate supper. (Lakoff 1976 : 277)

(13) a. *Near *John*, *he* saw a snake.
b. Near *him*, *John* saw a snake. (Ibid : 278)

(12–13) b では，(9–11) b と同様に，name が pronoun の右にあるが，同一指示解釈が可能となっている。さらにまた (13 a) においては，(9–11) a と同様に，pronoun が name の右にあるのに同一指示解釈が不可能となっている。このように (12–13) の例は，Avoid 'New' NP が単に線的順序に従って適用すると仮定したのでは同一指示の現象を説明しきれないということを示している。

しかし，ここでもし (12–13) b 及び (13 a) では Avoid 'New' NP が，(9–11) 及び (12 a) とは逆の方向に，すなわち右の NP から左の NP へと適用していくと考えられるならば，以上の事実はすべて語用論的原理 1 つによって説明できることになる。以下ではこの可能性について考えてみることにしよう。

従来から同一指示解釈は 2 つの NP の左右関係と統語構造における上下関係によって決定されることが指摘されてきた。この左右と上下の関係をこれまでにみた例文について考えると，これらを 4 つの場合に分けることができる。(I) 右にあってかつ構造的に下にある NP は 'New' ではありえない (9–10)。(II) 上下関係に差がない場合，右にある NP は 'New' NP ではありえない (11)。(III) 一方が左で下，他方が右で上の場合は，どちらの NP も 'New' NP でありうる (12)。(IV) しかし一方が左でかつかなり下にある場合 (VP につく PP 内など) その NP は 'New' NP ではありえない (13)。

このことを Avoid 'New' NP の原理を用いてできるだけ明示的に述べるために，ここで NP 位置の優先性 (priority) という概念を導入してみる。そして Avoid 'New' NP は priority の高い NP から順に低い NP へと適用されると仮定してみよう。そうすれば結果として priority の最も低い NP が最も 'Old' な NP 型になり，事実を正しく説明すると考えられる。ここでこの優先性を次のように定式化する。

(14) Priority of NP Positions:

i. If an NP position (A) is left of another (B), A is prior to B. (Assign 0 to A and −1 to B.)

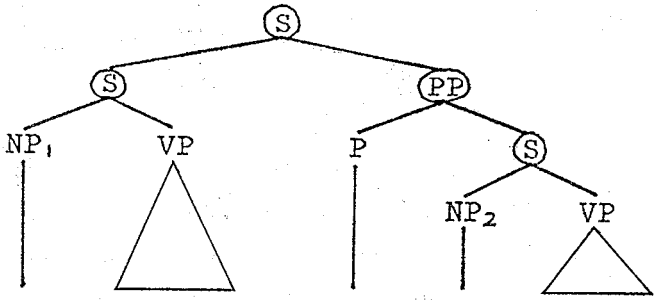
ii. If an NP position (A) is higher than another (B) in the syntactic tree, A is prior to B. (Assign 0 to A and x to B: x is the remainder after subtracting the number of branching nodes dominating B from that dominating A.)

iii. Add the points assigned by (i) and (ii). The total is the priority of the NP position.

(14) において，(i) は左右関係の優先性，(ii) は上下関係の優先性を示し，(iii) でこの2つの関係の相互作用による総合的な優先性を数値の和で示している。また (14 i) は左右関係に二値的な値 (0か −1) を付与するが，(14 ii) の上下関係では与えられる数値は多値的 (Aを支配する枝分かれ節点の数マイナスBを支配する枝分かれ節点の数) としている。これは (12–13) a で見たように，上下関係ではその差の大きさが同一指示解釈に関係してくるからである。これに対して左右関係では2つの NP の距離といった要因は解釈に影響してこないと考えられる。例えば (10–11) b では両方とも同一指示解釈は不可能となっているが，2つの NP 間の距離は異っており，近いほど可能になるというものではない。

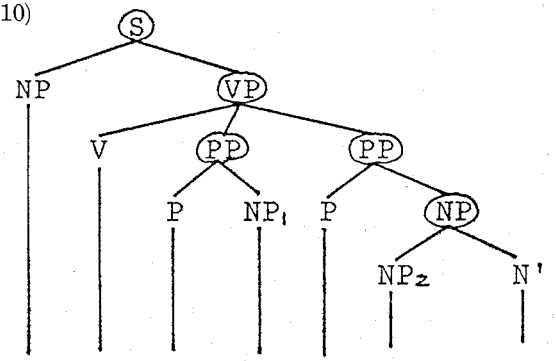
さて今定式化した (14) を用いてこれまでの例文の構造と NP の優先性を詳しく見ていくことにしよう。ここでは統語構造を簡略化して示すことにし，特に枝分かれしない節点 (non-branching node) は省略する。また問題となる2つの NP を支配する枝分かれ節点は丸で囲って示す。

(15) (=9)



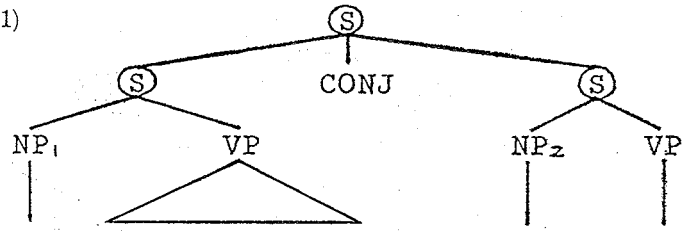
a.	*John*	ate	supper	before	*he*	left	town
b.	* *he*	ate	supper	before	*John*	left	town
i.	0				−1		
ii.	0				−1		
iii.	0		>		−2		

(16) (=10)



a.	I	spoke	to	*Ben*	in	*his*	office
b.	*I	spoke	to	*him*	in	*Ben*'s	office
i.				0		−1	
ii.				0		−1	
iii.				0	>	−2	

(17) (=11)



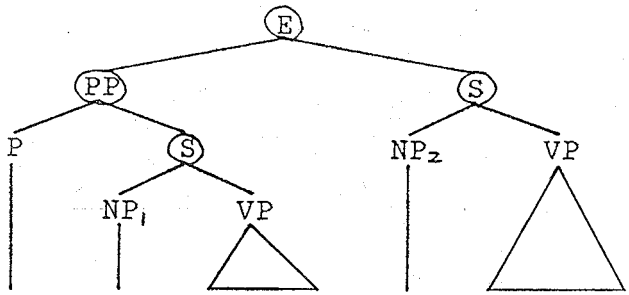
a. *Rosa* entered the room and *she* collapsed
b. * *she* entered the room and *Rosa* collapsed

i. 0 −1
ii. 0 0
iii. 0 > −1

ここで Avoid 'New' NP principle は NP 位置の priority に従って順に各 NP に適用されていくと仮定する。すなわち各図の (iii) に不等号 (>または<) で示されているように，priority の高い NP から低い NP へと適用されるものとする。すると上の (15–17) では NP_1, NP_2 の順でこの原理が適用され，(15–17) a では NP_2 が NP_1 よりも 'Old' な名詞句型 (代名詞) になっているので Avoid 'New' NP に従っていると言える。これに対し (15–17) b では NP_2 が NP_1 よりも 'New' の名詞句型 (name) となっているため，この原理の違反となる。このようにして同一指示解釈が (15–17) a で許され，(15–17) b では許されないことを語用論的原理によって説明することができる。

それでは a, b ともに同一指示解釈が可能な (12) の例はどうだろうか。(7)

(18) (=12)



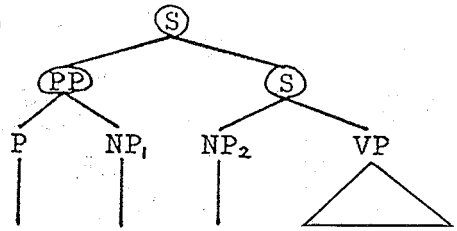
a.	before	*John*	left town	*he*	ate supper
b.	before	*he*	left town	*John*	ate supper

i.	0		−1
ii.	−1		0
iii.	−1	=	−1

priority の定式化 (14) に従えば (18) では NP_1 と NP_2 の値が同じとなる。こういう場合は，Avoid 'New' NP はどちらの NP 位置からも適用できると考えて良いだろう。すなわち NP_1, NP_2 の順で適用すれば (18 a) が，NP_2, NP_1 の順なら (18 b) が正しい予測として得られる。この例では左右の priority と上下の priority が相殺されていると考えられる。そして (14) の priority の定式化はこのことを正しく表していると言えるだろう。

しかしながら (13) の例については問題が生じる。(13) の S 構造は一般に (19) のように考えられているからである (cf. Reinhart 1983)。

(19) (=13)

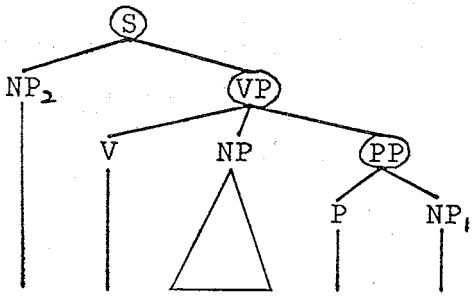


a.	*near	*John*	*he*	saw a snake
b.	near	*him*	*John*	saw a snake
i.		0	−1	
ii.		0	0	
iii.		0 >	−1	

(19) では NP_1 の方が NP_2 よりも prior であり，Avoid 'New' NP は NP_1, NP_2 の順に適用されることになる。すると (19 a) の *he* は適格であるが (19 b) の *John* は原理の違反ということになり，事実と反対の予測をしてしまう。

この問題に対しては2つの解決法が考えられる。まず1つは Guéron (1984) が示している LF-reconstruction である。LF では VP につく PP (Verb Phrasal PP) は前置される前のもとの位置に戻されると仮定してみよう。すると例文 (13) の LF 表示は次の (20) となる。

(20)



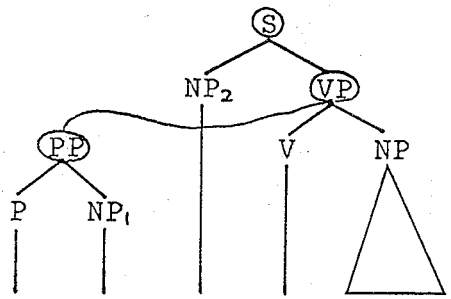
a.	* *he*	saw	a snake	near	*John*
b.	*John*	saw	a snake	near	*him*
i.	0				−1
ii.	0				−2
iii.	0		>		−3

そしてさらに Avoid 'New' NP が LF で reconstruction が起こったあとに適用すると仮定すれば (13) の同一指示の事実を正しく説明できる。すなわちこの原理は (19) でなく (20) に適用するので, その適用順は NP_2, NP_1 となり, a が違反, b が適格となるからである。

しかしこの解決法には, LF-reconstruction という移動の性質がはっきりとしていないという問題がある。またそもそも priority の定式化 (14) のうち左右関係の priority (14 i) は, S 構造あるいは Surface Structure (PF) での左右関係を扱っているものであるから, LF で左右関係の priority が決まるというのは矛盾することになる。

(13) を説明するもう 1 つの可能性は, McCawley (1988) などが提唱している discontinuous constituency (不連続構成素) の構造を仮定することである。この考え方に従えば, 例文 (13) の構造は (19) ではなく (21) となる。

(21)



a.	*near	*John*	*he*	saw	a snake
b.	near	*him*	*John*	saw	a snake
i.		0	−1		
ii.		−2	0		
iii.		−2	< −1		

(21) では前置された PP は, (20) のように S に付加されるのではなく, VP に直接支配されたままであり, V *saw* 及び NP *a snake* と sister の関係になっている。この構造では, NP_1 は上下の priority (ii) が −2 と低いので, 左右の priority (i) との合計 (iii) も NP_2 より低くなる。よって Avoid 'New' NP は NP_2, NP_1 の順に適用され, (21 a) の *John* はその違反となり, (21 b) の

him は適格となると正しく予測される。

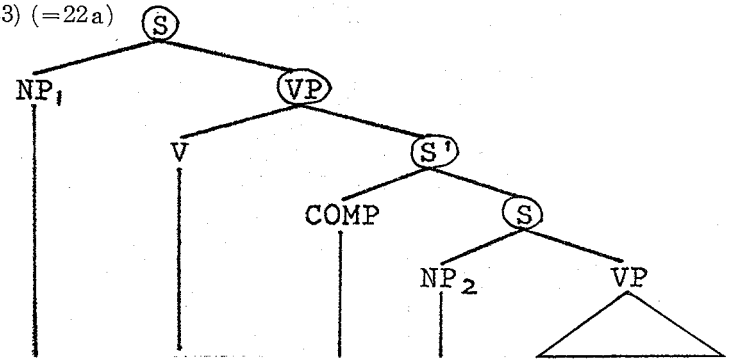
以上例文(13)に対する2つの解決法を示したが，本論では線形性を考慮に入れる立場から(20)の LF-reconstruction ではなく，(21)の discontinuous constituent を仮定する分析を採用する。

さて本節ではこれまで name と pronoun の同一指示解釈について見てきた。しかし第1節で述べたように Avoid 'New' NP はすべての名詞句型にあてはまる原理であるから，他の組み合わせについても，その構造と priority によって説明ができるはずである。ここではその一例として name と name の同一指示解釈を考えてみることにする。

(22) a. **Rosa* complained that *Rosa* had a headache.

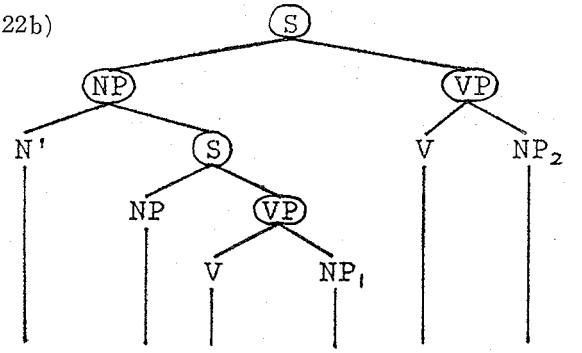
b. ?People who know *Nixon* hate *Nixon*. (Reinhart 1983 : 31)

(23) (=22a)



	**Rosa*	complained	that	*Rosa*	had a headache
i.	0			−1	
ii.	0			−3	
iii.	0	>		−4	

(24) (=22b)



?people	who know	*Nixon*	hate	*Nixon*
i.		0		−1
ii.		−2		0
iii.		−2	<	−1

priority の定式化 (14) によって (23) では NP_1, NP_2 の順, (24) では NP_2, NP_1 の順で Avoid 'New' NP principle が適用される。よって (23) では NP_2 の *Rosa*, (24) では NP_1 の *Nixon* が同じ name の繰り返しとなり，この位置で可能な pronoun よりも 'New' であるため原理の違反になっていると説明できる。

ここで (23) と (24) では NP_1 と NP_2 の priority の差が異なることにも注意したい。(23) では 0＞−4 でその差は 4 だが, (24) では −2＜−1 でその差は 1 である。もし差の小さい (24) では (23) よりも原理の違反の程度が軽いと考えられるなら，(22 a) と (22 b) の微妙な容認性の差も説明することができる。これは priority という数値で段階を示すことができるこの分析の利点と言えるだろう。

3. 語用論的原理の普遍性

以上，同一指示解釈を決定する一般的な語用論的原理があるということを論じてきた。まず第 1 節でいくつかの原理を，情報の新旧の階層 (7) に基づいて Avoid 'New' NP principle (8) に一般化した。第 2 節では NP 位置の priority (14) を定式化し，この原理の適用の仕方をいくつかの例について示

した。

さてこの節では最後にこの原理の普遍的性質についてふれることにしたい。まず次の英語と日本語の平行的な例を考えてみよう。

(25) a. *After *HE* woke up, *John* went to town.
b. After *he* woke up, *John* went to town.
c. *After ϕ woke up, John went to town.
(26) a. *彼が起きたあと，太郎は街に行った。
b. *彼は起きたあと，太郎は街に行った。
c. ϕ 起きたあと，太郎は街に行った。

(25 a) で同一指示解釈が許されないのは，*HE* が Avoid 'New' NP の subcase である Avoid Stressed Form に違反しているためと考えられる。(25 c) に示すように英語では時制文の主語の位置にゼロ代名詞 (pro) が生起できない。よって (25 b) の *he* には，Avoid 'New' NP の別の subcase，Avoid Pronoun は適用されず，(25 b) が同一指示解釈を受ける文となる。これに対して日本語では (26 c) のように主語位置にゼロ代名詞が生起できる。よって (26 b) は Avoid Pronoun の適用を受け，その違反であるため同一指示解釈は排除されることになる。このように (25) と (26) の違いは，時制文の主語位置にゼロ代名詞を許すかどうかという文法的要因から生じていると考えられる。

これに対し，Avoid 'New' NP のまた別の subcase，Avoid Full Name は英語と日本語で同様に働いていると思われる。次の例を考えよう。

(27) a.*?*John* said that *John* would win
b.***John* said that *John Goldsmith* would win.
(28) a.*?太郎は太郎が勝つと思った。
b.**太郎は岡本太郎が勝つと思った。

(28 b) の full name は (28 a) の name よりも Avoid 'New' NP の違反の程度が大きいと考えられる。同様に英語の (27 b) も (27 a) より強い違反となっており，この (27–28) の場合は，(25–26) とは異なり，英語と日本語でずれが生じない。

(26) で見たように日本語も null pronominal language の 1 つと考えるこ

とができるが，同様の他の言語についてはどうであろうか。Luján (1986) は，スペイン語・イタリア語・ポーランド語・中国語についても，語彙的な代名詞 (lexical pronoun) は非同一指示と解釈され，空の代名詞 (null pronoun) が同一指示とされるような例を上げている。ここではスペイン語と中国語の例を示しておく。

(29) a. *Si *él* no duerme, *Juan* se irrita.
b. Si $\underline{\phi}$ no duerme, *Juan* se irrita.
'If *he* doesn't sleep, *John* gets irritated.'
(30) a. **Ta* yi zuo-wan shi, *Zhangsan* jiu huijia le.
b. $\underline{\phi}$ yi zuo-wan shi, *Zhangsan* jiu huijia le.
'As soon as *he* finished his work, *Zhangsan* went home.'
(Luján 1986 : 248–49)

これらの言語においても，(29–30) b に示すように，主語位置でゼロ代名詞が許される。よって (29–30) a の overt pronoun, *él* 及び *ta* は Avoid 'New' NP の違反となり，同一指示とは解釈されない。

これに対し同じスペイン語でも前置詞の目的語の位置では (31 a) のように overt pronoun が要求され，(31 b) に示すようにゼロ代名詞は生じえない。

(31) a. Cuando hablan de *él*, *Juan* se irrita.
b. *Cuando hablan de ϕ, Juan se irrita.
'When they talk about *him*, *John* gets irritated.' (Ibid.)

この場合は Avoid Pronoun を (31 a) の *él* に適用すると (31 b) のように非文となってしまうので (31 a) は Avoid 'New' NP の違反でなく，同一指示と解釈されうるわけである。(31 a) と (31 b) は，(25 b) と (25 c) の英語の例とちょうど平行的になっている。

以上この節では，英語と日本語やその他の言語を対照させながら，Avoid 'New' NP principle が普遍的に存在すること，また null pronominal language であるかどうかというような統語的要因で原理の適用にずれが生じることを見てきた。示した言語の数はごく少数であるが，この原理は語用論的なものであるので，この他の多くの言語でも同様の事実が見られるものと思

われる。

5. ま と め

以上，同一指示の語用論的原理として，情報の新旧の階層 (7) に基づいた Avoid 'New' NP (8) を示し，この原理が統語構造中の priority (14) に従って順に各 NP に適用されること，そしてその語用論的性質のため普遍的であることを述べた。

最後にこのことを話し手と聞き手という観点からもう一度考えてみよう。話し手が表現を経済的にするために繰り返される名詞句を短いものにしようとするのは自然なことである。そしてこの省略を行う方向はその文内での線的順序だけでなく構造的な優位性によっても影響されると考えられる。また聞き手はこうした話し手の省略の方向を同様に想定し，話し手の同一指示の意図を読み取っているものと思われる。以上示してきた原理・階層・定式化は，このことをできるだけ明示的に述べようとしたものである。

〈注〉

(1) 本稿は日本英語学会第6回大会 (1988年11月，於青山学院大学) で口答発表した原稿をもとに加筆，修正をしたものである。コメントを下さった多くの方々に感謝申し上げたい。

(2) イタリック体及び下線の名詞句は同一指示を表すものとし，文頭の印は同一指示解釈のもとでのその文の容認性を示すものとする。またイタリック体の名詞句がない文の星印はその文が非文法的だということを表している。

(3) Avoid Name は Chomsky の一般的談話原理 (i) を言いかえたものと思われる。

(i) Avoid repetition of R-expressions, except when conditions warrant (Chomsky 1981 : 227, n. 45)

ここでは議論をわかりやすくするため，(i) ではなく Avoid Name principle を使っていくことにする。

(4) ここでは強勢の置かれた語を示すために大文字を用いることにする。

(5) Lakoff (1976) は次の階層によって同一指示の現象を説明している。

(i) proper names > definite descriptions > epithets > pronouns

また Givón (1983) は topic NP の continuity/predictability の階層として (ii) を示している。

(ii) zero > unstressed/clitic pronoun > stressed/independent pronoun > full DEF-NP > modified DEF-NP

さらに Ariel (1988) は Accessibility の階層 (iii) を提示しているが，これは Ariel 自身が述べているように Givón の topic continuity の理論と基本的には同じものと考えられる。

(iii) Joan Smith, the president > Joan Smith > The president > Smith > Joan > That/this hat we bought last year > That hat > This hat > That > This > SHE > she > herself > ϕ

(6) (7 i) の階層で 'New' の NP は 'Old' の NP よりも長いものであり，(7 ii) では強勢のため音として大きいと言えるだろう。文字で強勢が表わされる場合も大文字が使われるなど視覚的に大きく表示される。よって 'New' の NP は「大きい」という言い方は可能であると思われる。

(7) 節点Eは Expression という単位である。詳しくは Reinhart (1983) を参照。

参 考 文 献

Akmajian, Adrian and Ray Jackendoff. 1970. "Coreferentiality and stress," *LI* 1, 124–26.

Ariel, Mira. 1988. "Referring and accessibility," *JL* 24, 65–87.

Bolinger, Dwight L. 1979. "Pronouns in discourse," *Syntax and Semantics 12: discourse and syntax*, ed. by Talmy Givón, 289–309, New York: Academic Press.

Carden, Guy. 1986. "Blocked forwards coreference," Lust (ed.), 319–57.

Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on government and binding*, (Studies in generative grammar, 9.) Dordrecht: Foris.

Givón, Talmy. 1983. "Topic continuity in spoken English," *Topic coutinuity in discourse*, ed. by Talmy Givón, 343–63. Amsterdam: John Benjamins.

Grice, Paul. 1975. "Logic and conversation," *Syntax and Semantics 3*, ed. by Peter Cole & Jerry L. Morgan, 41–58. New York: Academic Press.

Guéron, Jacqueline. 1984. "Topicalization structures and constraints on coreference," *Lingua* 63, 139–74.

Kuno, Susumu. 1972. "Functional sentence perspective: a case study from Japanese and English, *LI* 3, 269–320.

Lakoff, George. 1976. "Pronouns and reference," *Syntax and semantics*, vol. 7, ed. by James D. McCawley, 275–335. New York: Academic Press.

Langacker, Ronald W. 1969. "On Pronominalization and the chain of command," *Modern studies in English: readings in transformational grammar*, ed. by David A. Reibel & Sanford A. Schane, 160–86. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.

Levinson, Stephen C. 1987. "Pragmatics and the grammar of anaphora," *JL* 23,

379–434.

Luján, Marta. 1986. "Stress and binding of pronouns," *CLS 22*: *Part 2*, 248–62.

Lust, Barbara. (ed.) 1986. *Studies in the acquisition of anaphora.* Dordrecht: D. Reidel.

McCawley, James D. 1988. *The Syntactic Phenomena of English*, Chicago: Chicago University Press.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1972. *A grammar of contemporary English*, London: Longman.

Reinhart, Tanya. 1976. *The syntactic domain of anaphora*, MIT dissertation.

Reinhart, Tanya. 1983. *Anaphora and semantic interpretation*, London: Croom Helm.

Reinhart, Tanya. 1986. "Center and periphery in the grammar of anaphora," Lust (ed.), 123–50.

Solan, Lawrence. 1983. *Pronominal reference*, Dordrecht: D. Reidel.

Westergaard, Marit. 1986. *Definite NP anaphora*, Norway: Norwegian University Press.

安井　稔・中村順良. 1984. 『現代の英文法10: 代用表現』, 東京: 研究社.